事例2

経済的困窮や孤立に直面する学生への支援を、学生主体の団体を通じて実現。支援企業の思いにも応えつつ、新規課題の発掘や学生との交流深化で地域の活性化をねらう

千葉県・千葉市社会福祉協議会

左から
桒野さん、大西さん、
松浦さん、西條さん

千葉市は千葉県の中央部に位置する政令指定都市です。臨海部に幕張新都心を擁し、国際都市として発展を続けている一方、豊かな自然も大きな魅力となっています。市内では 14 の大学・短期大学があり、多くの学生が生活しています。

千葉市社会福祉協議会(以下、市社協)では、かねてより若い世代とのつながり作りを課題の一つとしてきました。学生主体の支援団体と連携し、食支援に関わることで、地域の学生と接点をもち、若い世代がかかえる生活課題に向き合っています。

千葉市社会福祉協議会

西千葉・学生コロナ支援「食材もってけ市」

地域福祉推進課 ボランティアセンター副所長　桒野(くわの) 貴輝(たかてる)さん

実行委員会　大西(おおにし) 航(わたる)さん／西條(さいじょう) 未来(みらい)さん／松浦(まつうら) 千晴(ちはる)さん

大学生への支援が届いていなかったコロナ禍初期

コロナ禍で生活困窮者の増加が社会問題となり、市社協にも通常時より多く、物資の寄付が寄せられるようになりました。具体的に、市社協は2019年3月に、千葉市およびセブン-イレブン・ジャパンとの間で、「商品寄贈による社会福祉貢献活動に関する協定」を締結しており、セブン-イレブン店舗で余剰在庫となった食品や日用品の寄贈を定期的に受けています。

寄贈品は支援物資として市内の児童相談所やシェルター等に配分されますが、アルバイトの打ち切りなどで学生も困窮しているのではないかと危惧した桒野さんは、市内の大学数校に、支援できることはないか伺いました。しかしいずれの大学からも「特に困ってはいない」という回答を得たため、具体的な取り組みには至りませんでした。

一方、収入が減り生活を切り詰める学生の現状を、間近で見ていた大西さんは2020年6月、仲間の学生数人とともに、食品や日用品を無償で提供するマーケット「食材もってけ市」を開始しました。第1回の来場者は20人ほどでしたが、「2回目も開催してほしい」という声を受け、大西さんらは実行委員会を発足させ、月2回のペースで食材もってけ市を開催しました。回を重ねるごとに来場者は増加し、500人を超えることもありました。次第に寄付やカンパだけで活動を継続するのが難しくなり、開催頻度を月1回に変えるなど、運営方法を見直さざるを得なくなりました。

食材もってけ市スタッフとの出会いが、大学生支援の手段につながる

その頃、大西さんと西條さんが市社協を訪れ、桒野さんと話す機会がありました。桒野さんは、食材もってけ市の存在に加え、実は多くの学生が生活に困窮していることも、初めて知ったといいます。当時のことを桒野さんは「当事者の声を吸い上げることの難しさを痛感しました。もちろん、面識のある大学生数人への聞き取りはしていました。しかし、かれらはたまたま、支援を必要としていませんでした。大学側からも『学生は特に困っていない』と言われたこともあり、学生はそんなに困っていないと認識していたことを反省しました」と振り返ります。

その後、市社協と食材もってけ市は改めて話し合いをし、市社協が物資を提供するかたちで食材もってけ市と連携することが決まりました。

食材もってけ市の最大の目的は物資の提供ですが、長引くコロナ禍で孤立を深める学生に同世代との交流の機会を提供することや、SNS等を通じて学生の現状を社会に発信し、問題提起していくことも、重要な意義として位置づけられています。その理由を大西さんは「物資の提供は

地域の施設を借りた会場には、セブン-イレブンからの寄贈商品のお菓子や日用品がズラリ

コロナ禍でアルバイト収入が減る中、毎回数百人の学生が来場。この日は日暮れ以降も開催した

助成金情報

(公財)JKA「2023年度 競輪・オートレースの補助事業に関する公示について」(2022年9月21日締切)

競輪・オートレースの売上金の一部で、社会的課題の解決に取り組む活動を支援することを目的とした助成。
(詳細は「JKA 2023年補助事業」で検索)

いわば対症療法であって、根本的な問題解決ではありません。活動を通して、学生が安心して学べるような社会に変えていくことをめざしています」と語ります。

アンケートを通して、学生がかかえる困りごとを掘り出す

その手がかりとなるのが、来場者に行っているアンケートです。困っていることや不安に感じていることなどを自由に回答してもらい、実行委員会が集計結果をSNS上で公開しています。「これこそが、学生同士の活動の強み」だと楽野さんは強調します。「市社協だけでできることは限られています。学生を支援したくても、市社協が直接学生とつながりをもつことは難しく、困りごとを率直に語ってもらうこともできません。でも、食材もってけ市はSNSを通じて2千人超の学生につながり、本音を聞き出すこともできる。アンケートの結果をSNSでオープンにするというのも、若い世代ならではの手法だと思います。そこから、まだ支援できていない新たな課題が見つかることもあります」（楽野さん）。

食材もってけ市の運営には、物資の調達以外にも、開催場所や物資の保管場所の確保などの課題があります。市社協はより多くの支援をすることも可能ですが、過度な介入はしていません。

市社協が黒子に徹する理由を、楽野さんはこう説明します。「食材もってけ市については、学生同士だからこそ、利用者が遠慮せず支援を受けられるという側面があると考えています。また市社協の役割は、交通整理のようなものだと思っています。支援したくても届ける手段をもたない企業があり、一方で支援を待つ人の身近にいながらも体制が十分ではない団体がある。市社協のミッションは、課題を拾い上げ、双方の思いを受け止めて橋渡しをし、課題解決に導くことだと思います」。

支援を受ける人の気持ちに寄り添った対応

支援を得たい人にためらいや後ろめたさを感じさせない配慮は、実は食材もってけ市という名称にも込められています。「やってあげているという、施しの意味合いがなるべく感じられない名前にしたいと思いました。学生がワイワイ楽しむお祭りのようなイメージを意識して決めました」（大西さん）。

西條さんと松浦さんも、もともとは利用者側でしたが、もらうばかりでは申し訳ないという気持ちから、スタッフに加わったと語ります。

西條さんは、「『困窮』とはどの程度の状態なのか。アルバイトができなくなったとはいえ、自分は困窮しているといえるのか」と無償での支援に対する疑問や罪悪感がありました。しかし「楽野さんから、『ほしい人がもらえばいいし、食品ロスの削減にもつながる取り組みなんだ』と教えてもらい、ためらわずに受け取っていいんだと思えるようになりました」と語ります。

さらに、松浦さんは「食材もってけ市に来るのを楽しみにしている人がいるので、このイベント自体をもっと楽しい場所にしたいと思い、会場でミニゲームを行っています」と言い、参加者視点に立った工夫をしています。

恩返しする先はどこでもいい、どこかに、誰かにつなげてほしい

楽野さんは今後、食材もってけ市との連携をベースに、若い世代に地域の活動に参画してもらうことを期待しています。ただし、必ずしも市社協への恩返しを望んでいるわけではありません。「大切なのは一人ひとりの気づきが育つことです。かれらの思いがそれぞれの場所で行動に移され、継承されるといいですね」と語ります。

西條さんは「市社協の活動や千葉市を身近に感じるきっかけになった。社会人になっても機会があればボランティアに関わりたい」、松浦さんは「千葉に対する愛着が生まれる一方で、地元の地域活動のことも考えるようになった」と感想を述べます。

楽野さんは「地域活動に若い世代の担い手不足がいわれますが、そんなことはありません。上の世代とは別の形で行動しているのです。既存の活動を存続するために、かれらを無理に引き込んでもうまくいきません。新しい世代が別の団体や手法で活動してくれることも立派な継承です」と語ります。「この一歩から社会全体を変えていく」という大西さんの思いと、市社協がめざすものは同じといえそうです。

支援者や農業団体から寄せられた野菜もズラリ。「これを機に自炊をがんばります」という声も寄せられる

地域の公園で、物資を選びながら学生スタッフと交流やミニゲーム。同世代との交流や実態を聞くことも大切な活動

食料だけでなく、生理用品など生活必需品も提供し、「生理の貧困」にも対応

イベント・講座情報

（公財）SOMPO環境財団「『環境水族館』アクアマリンふくしまオンラインツアー」（2022年8月12日締切、2022年8月21日開催）

自然の光が降り注ぐ館内や、生きものたちの本来の姿が見られる屋外エリアをツアーしながら、子どもたちが自然への扉を開く体験的学習の場としての水族館について話す。（詳細は「市民のための環境公開講座」で検索）